

終章

■ 「本章」を踏まえた全体の総括

此度の大学評価にあたり、本学の内部質保証のプロセスに基づき、大学基準協会が示す基準に照らして点検・評価を行った結果、概ね大学基準を満たしているものとする。他方、その中で明らかになった課題のうち、特に以下3点を重点事項として示す。

(1) 学修成果の可視化を活用した学修者本位の学びの推進

各種アンケート、アセスメントテスト等の IR データの活用によって、大学として経年で定量的に把握する仕組みは徐々に整ってきたところである。学生から見た学修成果の可視化としては、テスト結果のフィードバックや LMS を活用した年度ごとの振り返りと学科教員からのコメント等を行っているが、今後はさらに学修者本位の学びの推進に向けて、学生が自らの成長実感を確認できるようにしていくことが重要と認識している。例えば、上記のテスト結果のフィードバックと LMS での教員からのコメントは別個のものとして実施していたが、これらを一体として実施することでより実質的に学生自らの成長過程を確認する機会とすることを検討する。

(2) 学生・卒業生との協働拡充

人口縮小社会にあっても多様な入学生に確かな成長の機会を提供するためには、教職員だけでなく、在学生及び卒業生の参画が必須と考えている。大学にとっては、各種取り組みに学修の主体者の視点を取り入れて質の改善・向上を図ることができ、在学生・卒業生にとっては、自らが受け手ではなく提供者となることで自己を相対化して成長に繋げる機会となり、また身近なロールモデルと接することで自己のキャリアを考える機会となる等の効果が期待される。

(3) 大学の存続を可能とするための運営基盤の構築

大学を取り巻く環境が厳しさを増す中で、大学の存続を可能とするための運営基盤の強化を図る。具体的には、確固たるガバナンスを担保しつつも適切な権限移譲による生産性向上・迅速化、単なるデジタル化に留まらない業務プロセスの合理化、基盤となる採用・人事制度の見直しに取り組む。

■ 今後の展望

此度の自己点検・評価によって、あらためて多角的な視野・視点から本学の現状を把握・分析することを通じて、全学あるいは各組織単位における様々な強み及び課題を見出すことができた。前述の事項含む諸課題の解決に向けた方策の策定・実行にあたっては、中期計画に反映すると共に、毎年度の学長方針にも反映し、着実に取り組むこととする。本学が、将来にわたって社会に有為な人材を養成する教育研究機関として発展を遂げていくためには、教育研究活動をはじめとする諸活動全般に係る内部質保証体制を構築するとともに、自律的で継続的な大学運営と諸改革を支えるマネジメント基盤を強化・確立することが不可欠と認識している。また、序章にも記載した令和 4（2022）年度の大学運営体制の変更を始めとして、常に質保証に資する改善・向上活動に取り組んでいるが、着実に継続させるためには教職員への浸透が課題である。

今般の大学評価（認証評価）の受審はあらためて、内部質保証の実質化に向けて取り組むべき課題を再確認する機会となった。今後も、本学の諸活動における現況を学外の視点、

点検・評価報告書 様式

社会的な説明責任等も踏まえて常に把握するとともに、エビデンスに基づき全学として諸活動の有効性・適切性の検証を行い、恒常的な自己点検・評価を軸とした内部質保証の更なる実質化に取り組むこととする。

以 上